

「tovo™」について



「tovo/トヴォ」は東日本大震災によって、親を失った子どもたちを、青森から支援するプロジェクトです。

チャリティーグッズを制作・販売し、その経費を除いた全ての収益を、長期的な子どもたちの心のケアの為、あしなが育英会へ継続的に寄付し、青森から「あなたがたのそばにいつもいますよ」と伝え続けます。

おかげさまで、**2011年6月から2019年8月現在までの総寄付金は「¥7,796,476」**となりました。10年間（2011年6月～2021年6月まで）の活動を目指しています。引き続きのご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

チャリティー缶バッジなどのお取扱店 (2019.10 現在)

青森県内

- ▶青森市 A-Factory / アトリエカヌー / もぐらや / open plaza sora / open plaza sena / CAFE 0371 / カフェ・デ・ジターヌ (古川店) / boulangerie TATSUYA 青森店 / 古民家カフェ apricot
- ▶弘前市 ホームワークス / 津軽工房社 / パンブーフォレスト / 中国料理豪華楼 / Garret
- ▶五所川原市 タイムスライス
- ▶黒石市 木田理容所

青森県外

- ▶東京都 (杉並区) 大怪店
- ▶千葉県野田市 茶寮たるふじ
- ▶岡山県岡山市 レストラン Mint



表紙写真について ～「tovo paper でエネルギー特集をやる」この言葉を小山田代表より聞いた時、真っ先に浮かんだ絵は風力発電の風車だった。そこで県内の風力発電事情を調べると、青森県は都道府県別の風力発電出力量が 10 年連続全国 1 位であることを知った。強風で有名な龍飛岬をはじめ、津軽半島沿岸だけでも無数の風車が回っている。その中で撮影に適した場所を探し、つがる市のペンセ湿原周辺へと行き着いた。広大な畑の中にニョキニョキと風車が生えている景色はちょっとした非日常感を味わえる。モデルは古賀知世さん。撮影当日は猛暑日となったが、終始涼しげな顔を作り続けてくれた。おりこうさんで撮影を待ってくれていた娘のななきちゃんにも感謝申し上げたい。(工藤文昭)

次号「tovo PAPER No.23」も青森のエネルギーについて

僕の母校五所川原高校の大先輩に歌手三上寛がいる。『青森県の地図を見たことがあるだろう。下北半島はマサカリの形をしていて津軽半島はその人間の頭だ。一撃でやられる前の寸前。俺はその脳天のど真ん中で生まれた。』 寺山修司の「田園に死す」での三上寛のセリフ。10代だった僕の頭に強烈に残っている言葉だ。そのマサカリ半島は、今はエネルギー半島だ。巨大な石油備蓄基地、並ぶ風力発電のプロペラ、一面のソーラーパネル、さらには、原子力発電所、核燃料サイクル基地、使用済み核燃料中間貯蔵施設(建設中)が点在する。映画「ブレードランナー2049」の冒頭、スピナーが美しく並んだソーラーパネルの上を飛ぶシーンを観た時、これは未来の青森県だと思った。大自然に囲まれたのどかな田舎生活とはかけ離れた近未来がここにあるように感じている。りんごだけじゃない。ということで、次号は12月頃発行予定。(tovo代表 小山田和正)

フリーペーパー「tovo plus™」



「tovo plus」は、tovoの発行する月刊のフリーペーパーです。月に1度、青森県内に住むご家族のお話を伺い、311当時の様子、それ以降の考え方や生活の変化を時間の経過と共に記し続けています。100号、100ヶ月、100家族が目標です。

長かったようで、あっという間の91ヶ月。ついに残り9号、9ヶ月、9家族まで迫りました。最終号まで、どうぞご支援をお願い致します！

フリーペーパー「tovo plus™」配布ご協力店

青森県内

- ▶青森市 A-Factory / アピオあおもり / 肴ダイニング心 / ふたば写真館 / もぐらや / open plaza sora / open plaza sena / ヒーリングサロン LULU / アトリエ CANOE / カフェ・デ・ジターヌ / SUBLIME / miageru. / cafe 0371 / OOLJEE / レストラン Tera / boulangerie TATSUYA 青森店 / 古民家カフェ apricot / Okome Cafe & Bar 米 b
- ▶弘前市 まちなか情報センター / 弦や / 弘前市役所 / chicori / パンブーフォレスト / 太平洋画房 / Garret
- ▶黒石市 木田理容所 / おかしのオクムラ / 津軽黒石 こみせ駅
- ▶五所川原市 むすぶカフェ えいぶりる
- ▶つがる市 HMV イオンモールつがる柏
- ▶八戸市 Saule Branche Shinchō
- ▶平内町 BASE CAMP ▶野辺地町 自遊木民族珈琲
- ▶東北町 TBT 英会話教室

青森県外

- ▶岩手県 YOSHIDA LIFE
- ▶山形県 熊谷伊兵治ナメコ生産所 くまちゃんなめこ
- ▶福島県 田村市テレワークセンター テラス石森
- ▶東京都渋谷区 Only Free Paper / RE:BIRTH STUDIO
- ▶東京都杉並区 大怪店
- ▶千葉県野田市 茶寮たるふじ
- ▶大阪府大阪市 はっち
- ▶岡山県岡山市 レストラン Mint
- ▶広島県福山市 繁々 -tunatuna-



募集中

10年を目標にしたtovoの活動も早いもので、解散まで残り650日を切りました。残りの期間の中で、たま～に一緒に活動してくれる方をいつでも募集中です。お気軽にご連絡ください。

トヴォの最新情報は以下で更新中です。

- tovo2011.com SHOP shop.tovo2011.com @tovo2011
- @tovo2011 @tovo2011 @tovo2011

【発行】代表：小山田 和正 (email: info@tovo2011.com)
住所：〒037-0056 青森県五所川原市末広町14-1

【表紙モデル】古賀知世 【表紙撮影】工藤文昭



www.tovo2011.com

青森県のエネルギーにふれる ①

本州最北端の反核ロックフェス
大マグロック Vol.12 レポート

PEACE LAND・大マグロック YAM インタビュー

TAKE FREE

Vol.22 (OCT.2019)





―大マグロックはいつ始まったの？

YAM「大マグロックは、今年で12年目。2008年に始まったの***①**。2008年っていうのは、大間原発の建設の許可の下りた年なの***②**。」

―大マグロックスタート（2008年）の前から何か「活動」はしていたの？

YAM「僕、青森の生まれじゃなくて、青森に来て最初のうちは原発の事とか何も知らなかったの。（ブルーライトの方の）横浜生まれ平塚育ちで、東京で仕事してたんだけど、今から25年程前にこっち（青森県八戸市）に来て、初めてクルマの免許を取って、青森県内色々回ったんですよ。六ヶ所の方で何か工事やってんなってのは知ってたんだけど、何の工事は分かんなかったの。で、2001年にグリーンピース（ジャパン）が、ラ・アーク***③**ってあるじゃないフランスの、その周りで反対活動をしている『怒れる母たちの会』の人たちを呼んで日本をずっと回ったんですよ。お話をして（ラ・アーク再処理工場周辺では小児白血病が多発している）。それが2001年に八戸に来て、その時に話を聞いて、それで初めて再処理っていうのはどういうものかかっていうことが分かったの。それからです。色々動き出したのは。その前からも、反対運動をしている人たちがいるっていうのは知ってたんだけど、ある会に行った時にすごい違和感を感じたわけ。それっきりそういった場からは遠ざかっていたんだけど、2001年に話を聞いてからは、やっぱり自分も動かなければと思ったんですよ。そして、やるからにはカッコ良くやりたいと思ったんです。」

―どんなことを始めたの？

YAM「2001年に先述の『怒れる母たちの会』の講演会を八戸に呼んだ人たち、再処理に反対している人たちが八戸にいて、僕は那些人たちから八戸にも再処理に反対する会を作ろうよって誘われて入ったんですよ。僕以外のメンバーは今までずっと運動を続けてきた人たちだったんだけど、僕みたいな人（初めて運動に参加する人）に共同代表になって欲しいって言われて、ずっと運動を続けてきた人と僕とで共同代表になったんです。でも…なんか…自分はどう動いたらいいのかっていうのが分からなかったし、ちょっと距離を置いてたのね。でね、その頃から新聞をよく読むようになったんだけど、そうするとさ、県庁に申し入れをしに行く人がいつもお年を召した人なわけ。なんでそんな人ばかりで若い人いないのかなって思っていたこともあって、僕は申し入れの手順も分からないのに手紙を持って県庁行ったんですよ。」

―1人で？

YAM「1人で（笑）。その頃は鹿内さん***④**が県議会議員をやってる頃で、鹿内さんにこうこうこうでこういう手紙を持って来たんだけどって言ったら、手順が違うぞって言われて（笑）。でもいいからついて来いって言われて、そういう課に連れて行ってもらって手紙を渡したんで



す。一応、申し入れっていうのは個人からではなくて、団体からあった場合に受けるものだっていうこととかを鹿内さんから聞いて、そうか、じゃあ何か団体を作ればいいんだって思って、共同代表になっていた会からは僕は1人でやりますって言って抜けて『PEACE LAND』っていうのを作ったの。そして、1人だけの団体として申し入れに行ってた。」

―PEACE LANDではフリーペーパーを作りましたよね？

YAM「元々は共同代表をやっていた会にいた時に、僕みたいな人が入ったんだしフリーペーパーみたいなもの作ろうかって作り始めたのが『PEACE LAND press』っていうフリーペーパーだったの。…あ、いくつか持ってる？カラー刷りのやつでしょ？それは1人になってから作ったやつ（現在は発行休止中）。でね、その会にいた頃の話なんだけど、会を作った当初は僕があまりにもシロウトだったから、下北ツアーをやろうってことになって、みんなで出掛けたんですよ。その時に僕は（熊谷）あさ子さん***⑤**と会ったんです。あさ子さんの話を聞いて、俄然頭に來たわけよ。今までも他から話（土地買収、脅迫、その他諸々…）を聞いたことはあったけど、あさ子さんは実際“そういう目”に遭ってる人なのよ。ここの現場（大間原発建設予定地）もこんなになる前に見てるし。国策と言いながらも、やってることはヤクザみたいじゃない。何でそんなことが許されるんだらうって凄く頭に來て。それもあって、原発や再処理のことも色々調べ始めたかな。」

―「（反対運動を）カッコ良くやりたい」の一面だと思うのですが、カラー刷りの紙面では綺麗なイラストも印象的でした。あれはYAMさんが？

YAM「そう。高校がデザイン科だったんですよ。その頃から描いてる。その後は東京へ出てずっと服屋とかアパレル業界で働いてました。その頃は

原発嫌だなくらいには思っていたけど、活動は何もしていませんでした。」

―青森県への移住をきっかけに再処理にまつわる実状を知り、反対運動への参加へ独立しての活動へ反核ロックフェスの開催となっていくと思いますが、音楽的活動はいつから？

YAM「僕本当、正直なこと言って、こっち来てからなんですよ。楽器持ったのって。いや、以前からもやってたけど、それは面白半分でやってただけで…。こっち来て一番最初にサンバチームを始めたんですよ。魔太郎定食***⑥**と同時くらいかな。あとはDJだったり、saule branche shinchō***⑦**を僕と一緒にやってるタクちゃんと、zodiac nova, pop - machine & contemporary system***⑧**をやってます。基本的にはパーカッション。ギターはノイズギター。」

―僕も少しだけギターやるんで分かるんですが、YAMさんみたいな音出すのって、なかなかできない。

YAM「できないと思います（笑）。打楽器奏者だからああいうことができるのかなって思いますね。…あ、あと他にもやってるバンドがあってね、僕ら5年ほど前からイベントで『トルボヴォッコのおはなし』っていう物語を舞台にして、子供たちと一緒に演ってるんですよ。（原発）反対反対言っても、振り向いてくれる人ってほんのわずかなんですよ。なので、少し違うやり方も考えてみて、じゃあ、トルボヴォッコっていう架空の国を作るとしたら、僕らはどういうことをすれば良いんだらうっていう話を作ったんです。その中で絵で表現したり音で表現したり…柔らかな方法で伝えた方が伝わるんじゃないかとも思えてきてね。で、その国の楽団が、このあと出て来るトルボヴォッコ楽団。トルボヴォッコってtovoとも響きが似てるでしょ。小山田さん（tovo代表）に聞いたことあるんだけどさ、出所は一緒に宮沢賢治。イーハトーヴォ***⑨**。」



①**2010年のvol.3までは『PEACE LAND』が主催。2011年のvol.4からは反核の意志を持つ個人や団体が一つとなった『OhMAG-ROCKS（オオマグロックス）』が主催者として運営。②**2008年4月、経済産業省が大間原発設置を許可。同年5月、着工。1984年に大間町議会にて誘致が決議されてから24年を経ての着工である。***③**フランス、日本、ドイツ、ベルギー、イタリア、オランダから送られる使用済み核燃料の処理をするラ・アーク再処理工場。基本設計が似ていることから、六ヶ所再処理工場は「ラ・アーク再処理工場の日本版」「姉妹工場」とも言われている。***④**鹿内博。青森県議を5期務めた後、青森市長を2期務めた。2019年県議会議員に復帰。『脱原発をめざす首長会議』メンバー。***⑤**くまがいあさこ。大間原発建設予定地の地権者。建設に反対し、最後の1人となっても土地を売ることはなかった。2006年死去。***⑥**魔太郎定食。YAM他中心メンバーが決まっている以外は出演者も曲展開も即興で作り上げるバンド。割と轟音系。***⑦**青森県八戸市小中野8丁目にあるカフェ&ギャラリー ***⑧**YAMとタクの2人での活動がメインだが、3人編成のことも。アコースティックな音。 ***⑨**イーハトーブとも。宮沢賢治の作品中に登場する架空の理想郷。

【聞き手】なるみしう〜パーティー斯拉ッシュバンドATHLETIXギタリスト。レゲエ/ダブバンドCOBRA STYLEチェリスト。シネマディクト寄席高座建立係。青森フォレストワークス見習い。



本州最北端の反核ロック・フェス

大マグロック Vol.12 レポート

テキスト：なるみしう 写真：坂本小雲

青森市から車で1時間。肉厚でグリコーゲンを多く含み、甘味に特徴のあるホタテが育つ陸奥湾を助手席側の窓越しに眺めつつ走ると、次第にその景色の中には、大きなのっぼの白い風車が目立ち始める。野辺地町～横浜町に存在する大規模風力発電施設だ。毎年5月には辺り一面黄色で覆われる菜の花畑で有名な横浜町。あちらがブルーライトのヨコハマならば、こちらはイエローフラワールのヨコハマ。その横浜町に隣接するのが、核燃料サイクル施設を有する六ヶ所村である。

青森県北東部に位置する下北半島は、その特徴的な姿から「まさかり半島」の別名でも知られるが、その柄の部分、特に握りやすそうな辺りが横浜町(陸奥湾側)と六ヶ所村(太平洋側)にあたる。六ヶ所村には広大な土地を活かした大規模な太陽光発電施設や、やませ(東北地方太平洋岸に春～夏にかけて吹く偏東風)を活用した風力発電施設も稼働しており、多分にエネルギーシユな「まさかりの柄」となっている。

青森市から車で2時間。横浜町を抜けると、青森県内最大面積の自治体であり本州最北端の市、日本初の平仮名の市でもあるむつ市に入る。半島の中核都市であり、恐山やとびない旅館といった、見える人には見えるが測定することは難しい「霊

的エネルギー」に満ちた魅力溢れる地ではあるが、今回の旅では素通りだ。

むつ市中心部は、大別するとまさかりの刃の付け根部分。そこからまっすぐ北上すると、今度はフロントガラスに海が現れる。3億3,360万円の黒いダイヤや核兵器を搭載したどこかの軍艦が往来し、ブラキストン線が設定されている津軽海峡である。そこで右折すると、大規模風力発電施設(岩屋)や寒立馬が草を食む尻屋崎が見えてくる。しかし目指すはまさかりの柄の突端ではなく、刃の上端である大間町だ。左折し、運転席側の窓に津軽海峡を写す。

青森市から車で3時間。地元の温泉と津軽海峡のイカが大好きなマスコットキャラクター「あんきもん」が暮らす風間浦村にも、やはり大きなのっぼの白い風車がある。「あんきもん」に別れを告げると、ようやく目的地である大間町に入る。自宅玄関から145km。その間には様々な形のエネルギーが存在していたが、今この町にも大きなエネルギーが存在している。全く工事の進んでいない原子力発電所などではなく、その隣接地にて開催される世界唯一の反核ロックフェス『大マグロック』と、その大黒柱であるYAM、その人である。

Day 1 (2019.7.13)



2019年7月13日(土)～14日(日)、青森県下北郡大間町大字大間字小奥戸(大間原発敷地隣接地)にて『大マグロック Vol.12』は開催された。初日12:00、前もって聞いていた通り「だいたいその頃」にサウンドチェックを終えたノブの演奏がスタート。男が1人、ベースが1本。掻き鳴らされる4本の巻弦。驚いた。たった1人の体、たった1本の棹、たった4本の弦から放たれる音は固く、能天気な晴れた空を緊張させた。音は地面を伝わり、金網の向こう側の地にまで届いている筈だ。

続くCissy Strutは、弘前市で活動中のシティーポップバンド。先程までとは異なった硬度の音が、会場に漂う。確かな演奏により、芯の強さを感じる。安心して身を委ねられる音に、空は緊張を解いたように感じられる。会場から見下ろせる海をゆっくりと大きな船が滑って行く。その風景を金網が切り取る。心地よい音の中で、ため息が漏れる。

所謂「巻き」の進行となっており、予定されていた時間よりも早めにアカリトバリの登場となった。唄と三味線を担当するアカリと、アコースティックギターを担当するトバリの男女デュオ。福島県会津若松出身のアカリの唄声が、真っ直ぐ聴衆の心臓に届いている。福島民謡を主軸としてステージは進行し『会津磐梯山』では、会場から手拍子が。手を打つ拍が奇数と偶数の両派がいたことから、結果的に4つ打ち民謡となっていたのが面白かった。音楽はいつだってどこでだって自由なのだ。



自由といっても、ルールは存在している。自由であるための決め事が。即興とは、自由ではあれ無法状態ではない。混沌とした様を即興的に構築し、観る者聴く者に作品として届けてきたのがオドラデク道路劇場主宰である舞踏家福土正一と、その音を担う浅原ガンジーである。今回は「その場にいた」YAM らも加えてバンドも即興でこしらえられ、舞踏に寄り添う。サクスを吹きながらステージの周りを(裏も)歩くガンジー、ステージ上でギターと組んず解れつノイズを産み出すYAM、一挙手一投足衣裳表情その全てにあらゆる

感情を一度に詰め込んだように舞う福土。蛇に睨まれた蛙か、蛙を睨む蛇か。会場にいた全ての人、眼前の光景に身動きを封じられてしまっている。その舞踏、その音に込められたものは果たして何か。観た者、聴いた者は皆、頭の中でぐるぐると考えを巡らせつつ圧倒されていたのではな

ろうか。演奏と舞踏が止んだ時、何かをやり遂げた充実感のようなものを感じた。会場にいた人間、会場にいた動物、会場に吹いた風、つまり会場に存在した全てが作品の一部だったのだと気付く。

YAM が抱えていたギターはヤマハのパンフィカミニ。パンフィカは数多く世に出回っているが、ミニはなかなかレアな1本だ。多弦ギターのように見えるのは、ボディーの小ささからくる錯覚。1弦用のペグとサドルが外され、5弦仕様となっていた。パンフィカミニとVOX小型真空管アンプAC4C1-MINI-BLという、ミニミニコンビを撤収し終えたところで声を掛け、山梨の歌う弁護士中のひろのりの強いメッセージが込められた歌声の中、(前記の)YAMへのインタビューを行った。

ステージでは、弘前市を中心に活動中のロックバンドcreepsのヴォーカリストである竹内晃が、彼にしか作ることのできない世界を作り上げていた。その歌声、優しく爪弾かれるギターの音色に



惹き込まれる。楽曲自体の魅力も大きく、繰り返し聴きたくなる、一緒に歌いたくなるものばかりである。この日のセットリストの最後にはcreepsの名曲『世界はそっと美しい』が用意されていたが、ゲストプレイヤーとしてYAMとタクも加わっての演奏となった。竹内がステージを下りた後もYAMとタクはそのままステージに残り、トルホヴォッコ楽団がスタンバイを始める。YAMとタクにドラム、そして女性3人を加えた6人編成楽団であり、打楽器3人、ギター1人、鍵盤1人となっている。子供たちの耳にやさしく響く音色と言葉で構成された楽曲が、実に愛おしい。音から理想郷トルホヴォッコの物語が見えてくる。未来を担う子供達は、どんなトルホヴォッコを築き上げていくのだろう。

『大マグロック Vol.12』1日目のラストを飾るのは、神奈川のBallad Shot。アイリッシュフォークに日本語をつけて歌う事から始まったという3ピースバンドで、アコギが2本とジャンベというベースレス編成。多くの人が「パンクバンド」という言葉からは想像しない編成だと思われるが、彼らから放たれる熱量や鋭いメッセージから感じるものは、まさにそれと言ったところか。卒業式定番曲『仰げば尊し』（実は『Song for the Close of School』というアメリカの曲が原曲であることが2011年に判明）のメロディーにのせ、会場の皆と気持ち良く「安倍～さら～ば～」と唄い、大マグロック初日は終了となった。

Day 2 (2019.7.14)

快晴。刺すような陽射しが、大間のあっちにもこっちにも分け隔てなく降り注いでいる。大マグロック会場ステージ横には「こちらのステージ音響は100%太陽光発電で発音しています」と書かれた大きなボードが置かれており、そのボードと向かい合うようにソーラーパネルが並んでいる(160w×20=3200w！)。これらは、山形は天童市の自然エネルギー専門店『ソーラーワールド』がイベント趣旨に賛同し、毎年大間へ駆けつけ設置、

管理しているものだ。今日は太陽光だけでなく風も強いので、風力での電力確保も大いに期待できる。

強めな風に乗って、時に切り裂いて、類家心平のトランペットの音が耳に届く。若手No.1ジャズトランペッター類家心平（るいけしんぺい）は、八戸市出身。過去にYAMやタクと共にバンド活動をした経験もある。今回はカルテットでの参加だが、キーボードの中嶋錠二も八戸市の出身だ。日曜の朝10時から大間の陽の光と風に包まれて、上質な演奏に身も心も委ねている。少し不思議な感覚だ。しかし、この状況が当たり前の風景であっても良いのだ。気持ちの良い朝に上質な演奏を楽しむことが、今確実に行えているのだ。これからだって行えるはずだ。もし行えなくなるとしたら、それはどんな理由でか。それを止めることはできるか…。約50分間のカルテットの演奏の間、己の低質脳の片隅では、そんなことに電力を割いていた。

類家心平も「前から出たいと思っていた」大マグロックは、前述のように2008年にスタートしている。「反対集会ばかりでは若い人が来てくれないだろうから、音楽も入れてやりたい」というYAMの思いが形となり、反対集会前の1時間をもらって始まったのだ。東日本大震災のあった2011年（Vol.4）までは、現在の場所ではなく『あさこはうす』（熊谷あさこさんが最後まで守った大間原発未買収地に建てられた、反原発運動のシンボリックログハウス）にて開催されていた。そのステージには、趣旨に賛同した三宅洋平やPANTA、OKI DUB AINU BAND、ランキンタクシー、ラビラビ、いしだ壱成等の全国区で有名なアーティストが多数上ってきたが、最近の開催では地元青森県で活躍するバンドや歌手の割合が増えてきている。それは「その県内からの出演者が、地元の子たちを連れてきてくれたら良いなあって思ったの。もっと身近なものにしていきたいんですよ、エネルギーのこと電気のことを考えることを。原発の話題って控えた方が良さものだって思っている節、若い人達の中に割とあるじゃない。そう思われているようなところが。でも本当は若い人達こそ一番関わっていかなくちゃいけない問題だと思うん



ですよ。政治的な話じゃないんです。身近にあって普段からたくさん使っている電気の話なんですよ。そんなことを考えて話せるきっかけになれば良いなと思うようになったんです。」という、YAMの考えからだ。

2日目の会場には、1日目と明らかに雰囲気の違いが参加者が目立つ。身に纏っているものや手にした旗、プラカードに様々な言葉が並んでいる。全国から「原発いらない」の意思を表示する為に大間に集まった、300を超える人達である。サンバのリズムに合わせて大間の町を歩き、自分たちの声を示す人々の長い列。年配の方が多い印象だが、子供の姿もある。歩みのスピードに差が生まれ、列は大間の町に長く伸びていく。パーカッションの音と人々の声が混じり合い、大間の空に染みていく。

デモ行進から戻ったYAMは、ひと息つく間もなくステージへと向かう。『大マグロック Vol.12』の最後を締めくくるのは、YAM率いる魔太郎定食だ。本日のステージには、昨年急逝された核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会代表、澤口進氏の写真が飾られ、花が供えられている。YAMはその花を手にとると、自分の首元に挿していく。顔はほとんど隠れてしまっている。YAM自身が供えられた花束のような姿になる。その姿でパシフィカミニを抱き、あらゆる感情が渦巻き交ぜになったような音を出していく。ドラム、ベース、YAMも含めてギターが三本。途中、YAMはパーカッションやマイクに持ち替えての即興演奏が続くが、バンド内



での音を介した意思疎通が高次でなされており、聴衆は深くその音世界に没頭できている。澤口氏へのメッセージが聴こえるようだ。語りかけているのが分かる。共に闘ってきた友と語り、これからを誓い、そして旅立ちを見守っている。ラストはYAMの文字通り言葉にならない叫び、ストレートな心の内が連射され、40分の音の旅は派手に締め括られていた。以上をもって『大マグロック Vol.12』は閉幕となったが、参加した皆の胸の中、頭の中、瞳の奥には、昨日よりも強固な何かが残っているように感じられた。その何かをどう育て、どう使い、どう広めていくことができるか。そしてその大きなエネルギーは、人々やこの星に何をもたらすのか。これは誰かの話ではなく、自分たちの行動が繋ぐ自分たちの未来の話なのだ。ゆっくりと夜へ近付いていく海と空の繋ぎ目をぼんやりと眺めながら考えていた。（終）

